

# 汲古一心

—講演より—  
『書作への途』(六)

中村素堂

しかし、どんな学問でも、工芸でも、この真似まねによって大きく進展してこないものはないと思う。巧書うまけないでイライラしている時に、何か他人の技術の中に、その救いの手法を見つけた時くらいうれしいことはない。うまくその応用が助けとなって作品を展覧会に列べておいたところへ、その技術を暗示あんししてくれた友人が見にきて、拙作せつさくの前でしばらく熟視じくし、「中村さんやりますね……」なんていわれたことがある。「うまくやりますね……」とは、「もうちゃっかり応用したね……」なのか。「君もこの手は知っていたのか……」という意味なのか、いやにハニかんでおじぎばかりしてしまったような気がする。今こうしていても顔がわからむようです。

よく考えてみると、一線一点でもこうして少しづつ中国・日本といわず、むかし、今といわず、隣近所のやっている手法まで、こっそり頂戴とうがいし貯たくわえてきたものでないものはない。

これが何と、私のお弟子さんたちのものまで、良いと思うものは遠慮えんりよしないのだから、随分眼くせの悪い話だが、わずかにこれには

滅罪めつざい生善の途があつて、有り難い救いとなつている。それはこのようにして拾い集めたものが何とか消化されると、すぐそれを誰にでも惜おしまずに手本にも書き、作品指導にも使つて一緒に移り変わつてゆくことにしています。

惜おしんだつて死んで持つてゆけるものでもなし、みんなで楽しめればそれ以上のことはない。だからこれも、そんなに年中新しいものが見つかるわけもないけれど、他に芸もなく趣味もない私には、年中キヨロキヨロして書道道路上に良い拾い物はないかと探している次第です。

口癖であるが、人間慾よくが深くなければいけない。やり遂とげたいものについては、はげしい執心しやくしんを燃して見聞し練習してみると、やらない人には判わからない愉うれしい展開があり、醍醐だいご味もあるもので、以上並べたことなど、ほんの門の入口で、もつともつと幅のある資材を蓄えられる日があることを保証いたします。

その根本は何といつても斯道しどうに対する大慾すなわち執心であり、良いものを書きたがることです。

〔祭墨、昭和五十六年十月〕

春雨真堪喜 晚來轉細微  
潑花仍濺柳 點點滴吟衣

春雨真堪喜 晚來轉細微  
潑花仍濺柳 點點滴吟衣 (閑雲遺稿)  
昭和五十一年